

実践報告

語学 TA 派遣型への海外研修プログラム再構築： 理系学生によるアクティブな英語運用と 日本語指導による異文化交流

小野 真嗣^A

Science Students' Language Learning and Teaching in Overseas Study Tour: To Produce the Opportunity for Active English Use

Masatsugu ONO^A

Abstract: This paper describes the practice of an overseas study tour program in which Japanese college students of science major not only learn English (EFL/ESL) but also teach Japanese (JFL/JSL) to English college students as teaching assistants. The purpose of this practice is to produce the opportunity that they are able to use English actively with a sort of work role in order to avoid passive learning. By offering such an opportunity to the students, the author expects that they use English as a foreign/second language, see Japanese as their first language again in a fresh light, and cultivate their intercultural understanding competency more than ever before. As a result of the practice, the students had a good opinion of the practice. They thought that their English skills were improved and they got more motivated after the practice. In addition, they were very satisfied with their experiment of teaching Japanese through English by analyzing the questionnaire on the practice.

Keywords: overseas study tour, teaching assistant, active language learning, intercultural understanding, learning motivation

1. はじめに

本稿は、理系大学における海外語学研修プログラムを一事例として取り上げ、研修に参加する学生が先方大学においてティーチング・アシスタント (Teaching Assistant、以下 TA と記す) に準じて従事¹し、実務性のある言語使用の場で活動することによって、外国語 (英語) 運用・母語 (日本語) 理解・異文化交流の3点について体験的に学習できる短期教育プログラムの構築について論じるものである。

著者は北海道南部に立地する国立理工系単科大学である室蘭工業大学 (以下、本学) に勤務している。本学をはじめ、地方大学に共通する実情として前置きさせて頂くが、大都市における大規模展開する諸大学と異なり、外国人と直接触れ合うことができる場面は極めて限定的であり、学生の異文化交流経験は海外語学研修プログラムにより提供されているという特有の背景がある。本学は南半球オーストラリア・メルボルン市にあるロイ

ヤルメルボルン工科大学 (Royal Melbourne Institute of Technology、以下 RMIT と記す) との学術交流を平成10年度より実施し、平成28年度で19年目を迎え、長期にわたり実働性のある交流の歴史を有している。交流開始当初は、英語語学研修のみの試行的かつ一方向の派遣交流であったが、翌平成11年度に学術交流協定を締結して正式に姉妹校となって以来、本学学生の英語語学研修のみならず、親日で知られるオーストラリアの日本語教育事情も反映し、RMIT の日本語履修生 (以下、RMIT 学生) との異文化交流も重要な比重を占めるようになってきている。また、RMIT 側からも日本語科目を履修する RMIT 学生の日本語研修を本学に受け入れてほしいとの強い要請が出てきたため、平成16年度以降は本学側からの学生研修派遣だけではなく、RMIT 側からの学生研修受け入れも本学で実施されるようになり、平成28年度には12年目を迎えている。その間、お互いの派遣交流プログラムの精選・改善を行いつつ内容の充実化を図り、3年前の平成25年度以降の本学からの研修派遣では、いわゆる英語語学研修に留まらず、

^A 室蘭工業大学大学院工学研究科

RMIT の日本語授業における TA に準じて参画させる業務型プログラムを立ち上げ、派遣学生自身の英語・英語圏文化の涵養に加え、日本語・日本文化の伝達や再認識へつながら効果をねらい、プログラムを再構築した。本稿では、主にそのプログラムについて論じ、事後アンケートに基づいてプログラム実施効果について報告することとした。

2. 先行研究

海外語学研修は近年では各大学・高専・高校と校種を問わず教育機関全般において実施される時代となり、各担当者によって活動概要等の事例報告がなされている。本稿におけるプログラムにおいては、次に述べる活動事例に影響を受けている。

吉田・小寺(2012)は、手探り状態からの姉妹校間の海外語学研修の構築について論じており、特に研修中に教員・学生の双方が気づく不足しがちな点、つまり教員側による学生への事前説明不足、英語環境の活用の不十分さ、学生側の英会話の継続性を含めた知識・情報の準備不足等について例を挙げて細かくまとめられている。中でも渡航先の英語環境の活用に関する反省や必要性について指摘しており、一方的な派遣ではなく双方のニーズに基づく研修プログラムの必要性を示唆している。

金子(2016)は、日本から海外へ留学する学生数が減少していると言われる中、現在は回復基調であることを指摘している。また留学前後で英語学習の動機付けが統計的に有意な差を示した点を論じている。

本稿では語学研修における英語動機づけ向上の質的な利点は失わずに、より学生の能動的な活動を取り入れるべく、かつ協定大学間のニーズに合致したプログラムの再構築について注意を払いつつ実践することとなった。

3. 問題の所在

本プログラムの目的は、いうまでもなく本学に在籍する理工系学生としての英語運用力向上を第一義としている。一般に理工系学生は英語を苦手としていると言われる²中、本学学生も同様の傾向が認められる。小野(2013、2016)は、理工系学生においても英語運用力、とりわけ技術現場におけるコミュニケーション力が必要となっている情勢について指摘しており、本学もこのような状況

の中で海外語学研修プログラムを実施している訳である。実施上の問題点として、英語を苦手としながらも海外に興味のある学生が参加する中で、以前は語学研修姿勢や教育システム自体が受動的活動に終始するといったプログラム構成上の問題があり、その能動的活動への改善・転換が長年に渡る課題であった。学生個々人の英会話への意識改善は、現地で知り合った受講生とのコミュニケーションを通じて見られ、一定の満足度はこれまでも得られていたものの、学生が主体的にかつ能動的に実務性のある活動という点では脆弱な面が残り、そういった機会の提供は学生・教員双方の悲願であった。目下、アクティブラーニングが叫ばれる時代へと移り変わり、より一層そのような活動の機会提供は急務となった。

一方で、本研修は最長でも2週間強のいわゆる短期研修に分類されるプログラムであり、実現には時間的制約、期待できる教育効果の限界、派遣学生が駆使できる言語運用の範囲があるため、とりわけ社会で求められる実務に耐えうる英語運用力と発展途上の履修学生の英語能力との差が大きいこともあって、この点の克服が望まれていた。そこで、これまでの海外研修プログラムの再構築を行うべく編み出されたものが、以下後節で述べる事業である。問題の所在及び期待される改善点を(1)にまとめる。

- (1) a. 日本から派遣される一方向で、かつ受動的な語学研修から、学生が主体的・能動的に活動できるプログラムの転換により、現地学生との異文化交流を通じ、双方の国際性を涵養させること
- b. 派遣期間が最長でも2週間強のため、派遣学生の急激な英語能力向上は見込めないものの、彼らが学習して得た知識・技能を活用する機会を設け、運用可能なレベルの下で、実務的な業務を創出すること
- c. 本学のみならず、先方の RMIT においても、ニーズを満足する活動を確保し、協定大学間の持続的友好関係を継続させること

(1) を満たすため、これまでの研修日程を再編し、RMIT 日本語履修生との異文化交流活動及び彼らが履修する日本語授業における TA 業務を英語及び日本語で行うこととして能動的な活動の

場を創出することとなった。これにより、現地日本語教員が実施する授業の教育補助業務に従事することを通じて、英語習得や運用に加え、自文化である日本語・日本文化の再認識を海外視点より促す点も副次的な目的とした。本プログラムにおける英語語学研修および日本語語学アシスタント業務を通じた活動は、日英両語の言語運用を直接的に観察し習得の手助けになることが期待され、両大学の学生にとって大変有用で高い教育的効果が見込まれる。最終的には、国際交流体験を通じた直接的な異文化理解の場を提供することにより、本プログラムに参加した学生が国際的な広い視点を有し、精神的な逞しさを兼ね備えた、即戦力としての工学系グローバル人材の育成がプログラム延長上にある終着点である。再構築したプログラムを実施するにあたり、達成目標としては(2)を掲げることとした。

- (2) a. 世界に目を向け、大学で学修した事項を活かし、グローバルな課題に取り組む能力を習得する。
- b. 海外の技術者と交流することができる基礎的な外国語コミュニケーション能力を習得する。
- c. 自文化認識、異文化理解を通じ、多様性への寛容な態度を獲得する。
- d. 不測の事態にも適切な状況判断や支援の要請を通じ、困難な状況においても自己解決を図ることのできる対応力を獲得する。

4. 実践の内容

本節では、平成28年度に実施した海外研修プログラムを例に、再構築したプログラムの実践報告として論じることとする。なお、再構築前より実践されていた本学学内で行われた事前研修、現地における英語語学授業については割愛し、主に TA の項目に焦点を当て論じるものとする。

4.1 プログラム概要

研修プログラム期間については、日本国内の大学等で行われている一般的な事業と大差無い2～3週間程度のものである。本プログラムの特徴としては、表1で示す通り、第2週目の TA 業務の部分を作成することにより、受動的な英語授業のみではなく、学生自身の能力を発揮できる活動機会を設けたことである³（当該部分は下線で示してあ

る）。

表1 研修日程表

日付・曜日	午前	午後	夕方以降
8/27 土	—	日本出発	機内
8/28 日	現地到着	ホームステイ	ホームステイ
8/29 月	オリエンテーション (英語学校)	オリエンテーション (RMIT)	ウェルカムパーティ ホームステイ
8/30 火 ～9/2 金	語学研修 (英語学校)	文化講義等 (RMIT)	ホームステイ
9/3 土	自由行動	自由行動	ホームステイ
9/4 日	観光ツアー	観光ツアー	ホームステイ
9/5 月	日本語専攻学生交流 (RMIT)	TA ミーティング (RMIT)	ホームステイ
9/6 火 ～9/9 金	TA 業務 プレゼン準備	TA 業務 プレゼン準備	ホームステイ
9/10 土	学生交流行事	学生交流行事	ホームステイ
9/11 日	現地日本語弁論大会視察 (ビクトリア州大会 Final)		ホームステイ
9/12 月	ホテル移動	English Presentation	フェアウェルパーティ ホテル
9/13 火	自由行動	自由行動	出発
9/14 水	機内	日本到着	—

一方、本プログラムに参加した本学・RMIT 双方の関係者は次の表2に示す。表2の通り、本学とRMIT の双方ともに、ほぼ同じ人数で構成されている。RMIT の日本語授業においては、非常勤講師を含めた複数名で展開されており、各開設時間に本学学生が TA として派遣された。

表2 プログラム参加の構成員数

所属	人数
本学学生数	8名 (男子6名、女子2名)
本学教職員数	2名 ※[]内は引率時期 (事務職員1名[前半]、教員1名[後半])
RMIT 学生数	11名 ※交流行事参加学生の人数。 日本語履修生はここに含まず。
RMIT 教員数	4名 (専任教員1名、非常勤講師3名)

4.2 ティーチング・アシスタント (TA) 業務

RMIT では intensive の日本語授業がレベル1から6までの6段階で展開されており、本学学生はこれらの授業に TA として参画した。日本の大学で

一般的に展開されている1コマ90分の授業とは異なり、3時間（180分）が単位時間となっているようで、本学学生は表2で示した第2週の4日間で、1人あたり3コマ分の計9時間（540分）の TA 業務に従事した。通常の日本語授業風景を以下の図1で示す。



図1 通常の日本語授業風景（写真）
（1テーブル受講生6名のうち TA を2名配置）

初級クラスでは図2で示す日本語教科書を用いた授業が展開される一方、中上級クラスではスピーチやテーマ別プレゼンテーションといった言語運用に焦点を当てた授業も多く展開され、各授業の担当講師と事前打合せで役割を確認の後、授業に臨むこととなった。本学学生は講義を丸々全て担当する訳ではないが、図3に示す日本語ネイティブとしての対話相手の役割の他、図4で示す個別の質問対応の役割も担っていた。応対には学習言語の日本語使用の他、説明言語となる英語を用い、初級クラスほど英語運用機会が増大する傾向があることから、本学学生は英語説明には苦労しながら、普段無意識で使用している母語（日本語）に対して意識を促し、理解を深めることとなった。

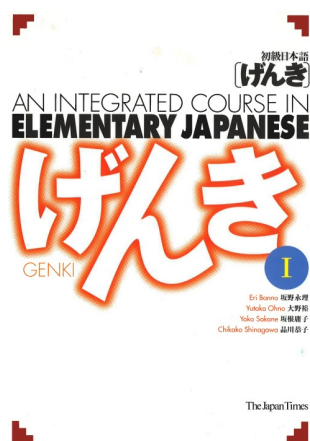


図2 使用していた初級日本語教科書「げんきI」



図3 コミュニケーション相手としての TA（写真）



図4 個別説明中の TA（写真）

また、TA 業務中に知り合った学生の1名が、その週末に図5に示す日本語弁論大会に、学習開始後半で出場することが授業内で知らされ、その指導補助に一部従事した学生もいた。後述の研修報告書にもあるが、本学学生には語学学習に対して大変刺激になったようであり、日本語弁論大会における発表者の日本語能力やプレゼンテーションの質の高さ、巧みなテーマ選択など、その後の本学学生達に迫る研修報告としての英語プレゼンテーションに対し、大きな意義付けとなったことは研修参加による副次的な効果と言えよう。



図5 オーストラリア・ビクトリア州開催の日本語弁論大会の開催ポスター（写真）



図6 日本語弁論大会当日の様子（写真）

4.3 研修報告としての英語プレゼンテーション

帰国の前日の午後は RMIT における海外研修プログラム最終日であり、本学学生には滞在期間中の体験に基づいた参加学生各自のテーマ設定によるミニ調査研究の英語プレゼンテーションを課している。第2週の TA 業務の空き時間やホームステイ先帰宅後の自由な時間を利用しながら、学生個別にプレゼンテーションの準備を行った。上級学年ほどプレゼンテーション慣れをしており、テーマ設定や調査方法については素早くこなしていたが、下級生ほどプレゼンテーションそのものに慣れが無いこともあり、当初はテーマ設定から困難を抱える者もいて、RMIT の補助学生の支援も得つつ、全員がそれぞれ満足できる形で発表を迎えるに至った。無論、全員が英語プレゼンテーションは初めてであり、発表の構成の仕方や、*useful phrases* の手解きも受け、学生によってはリハーサルの支援を受けた者もあり、英語プレゼンテーションに真摯に取り組んでいた。(3)は学生が各自設定した調査研究テーマ（発表題目）であり、図7にプレゼンテーション準備風景、図8に発表風

景として示す。

- (3) a. The things I thought about after coming to Melbourne
- b. ANIME, animation
- c. Sports in Australia.
- d. Differences on language learning between Australia and Japan
- e. Australian Grub
- f. Traffic system of Melbourne: public transportation—bus & tram—
- g. Unique ecosystem
- h. Water saving



図7 プレゼンテーション準備作業の様子（写真）



図8 研修報告としての英語プレゼンテーション（写真）

(3)を見ると、交通工学・都市計画に関するもの、水道などインフラ整備に関するものが見られた。このように工学に根ざした内容がきちんと選択されたことは喜ばしい。メルボルン市は市内を縦横に路面電車が走っており、中心部は無料

で乗車可能なゾーンも設定されており、観光客には優しい街と考えてよく、その点に目をつけた調査研究があった他、オーストラリア特有の水不足について、シャワー利用時間が5分と制限された経験談を踏まえた水資源事情など、生活環境にも広げたテーマもあった。また、アニメ、スポーツ、言語といった文化の違いに焦点を当てたものもあり、英語プレゼンテーションを課すことが、英語を通じて工学・異文化を総合的に学ぶ機会になったと解釈している。

5. 結果と解釈

本節では、本海外研修プログラムによる効果について、参加した本学学生からの事後アンケート及び研修報告書に基づいて考察する。

5.1 事後アンケート

海外研修を終え帰国した後、参加した学生には、事後アンケートを実施した。一部、事務的な質問項目も含むため、本稿では教育活動にかかる部分を対象にアンケート結果について論じていくこととする。アンケートに用いた質問項目は(4)の通りである。なお、結果のグラフも(4)に続いて合わせて掲載し、分析・解釈についてはグラフ掲載の後に後述するものとする。

- (4) a. 研修期間の長さ
- b. 研修費用の価格
- c. 研修期間に対する内容の多さ
- d. 英語授業の回数
- e. 英語授業の期間設定方法
- f. 英語授業の難易度
- g. 英語授業のクラス編成
- h. 英語授業の満足度
- i. RMIT の歴史・文化の講義
- j. RMIT 学生との交流
- k. 日本語授業 TA の期間/回数
- l. 日本語授業 TA の業務内容に対する満足度
- m. ホームステイ先の満足度
- n. 研修による英語コミュニケーション力
- o. 研修による英語学習意欲

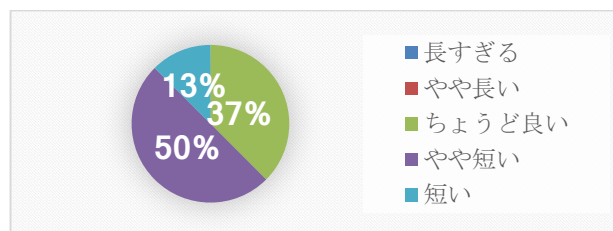


図9 研修期間

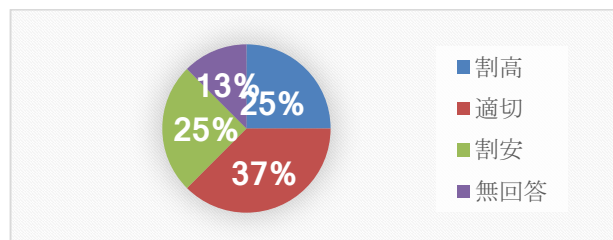


図10 研修費用

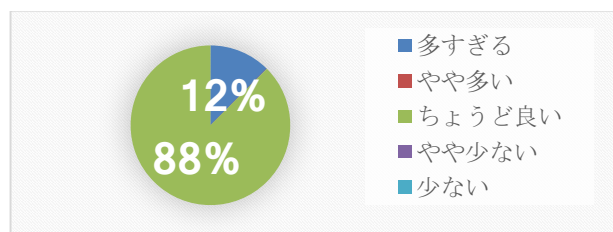


図11 研修期間に対する内容

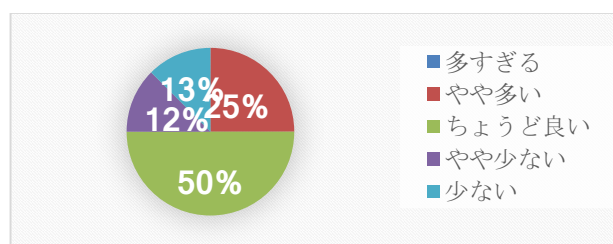


図12 英語授業の回数

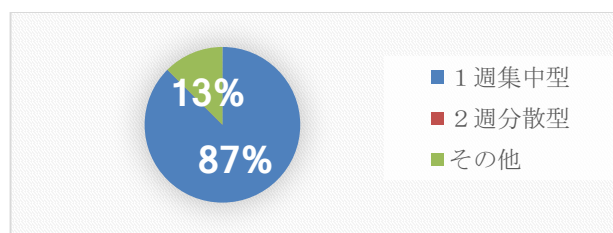


図13 英語授業の期間設定方法

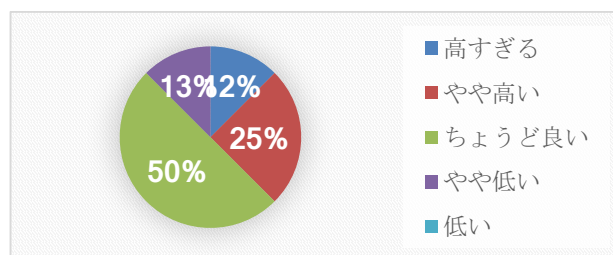


図14 英語授業の難易度

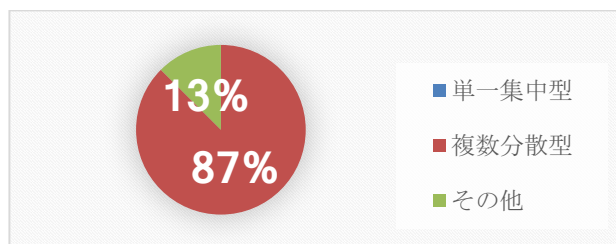


図15 英語授業のクラス編成

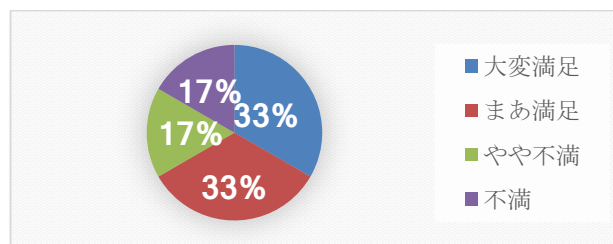


図20 日本語授業 TA の業務内容に対する満足度

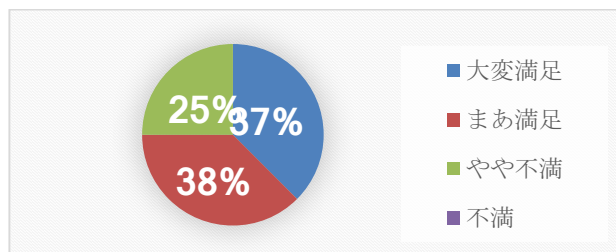


図16 英語授業の満足度

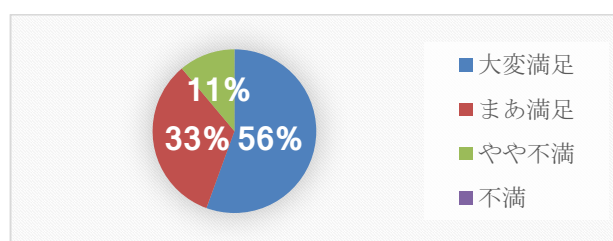


図21 ホームステイ先の満足度

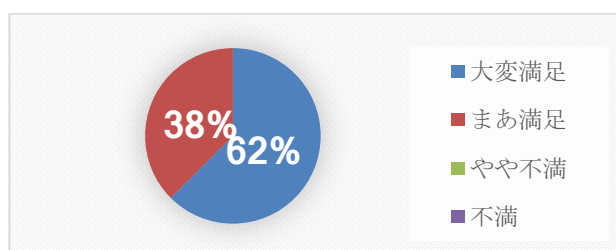


図17 RMIT の歴史・文化の講義に関する満足度

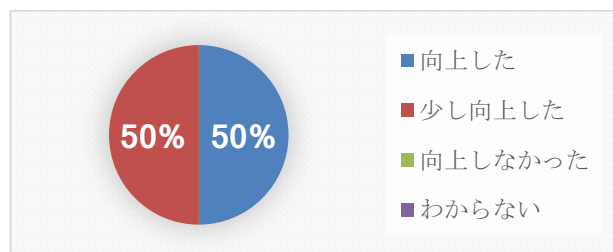


図22 研修効果（英語力）

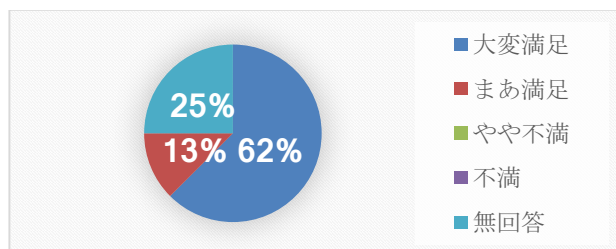


図18 RMIT 学生との交流に関する満足度

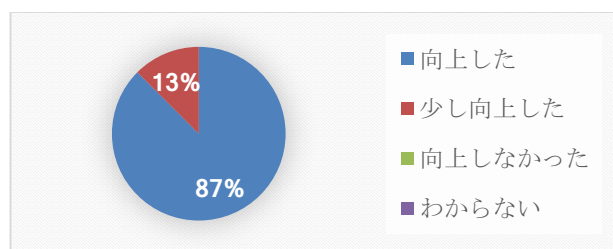


図23 研修効果（英語学習動機）

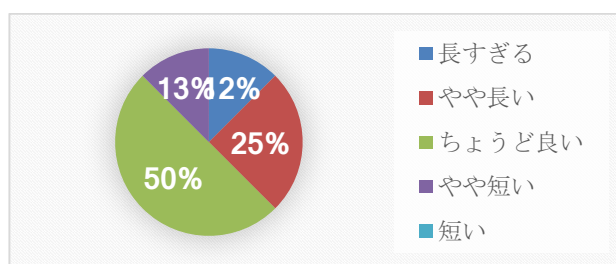


図19 日本語授業 TA の期間／回数

(4) a. については、図9に示す通り、37%にあたる学生が「ちょうど良い」と答える反面、「短い・やや短い」と感じた学生が63%であった。このことは全員が長さについては満足 of いく回答となったと解釈できる。精神的に与える負担感や不安感を極力少なく、研修の効果を上げるには今回の期間は最適であったと考える。

(4) b. については、図10に示しており、意見が分かれている。「適切・割安」感じた学生が半数を超えたものの、4分の1の学生は「割高」と感じる者もあり、費用負担については個別事情の要因が大きいと考える。しかしながら、割安と感じる者が割高と同数いる点からも、6割を超える者はプログラムとしては総じて満足度が高かったと考えて良いだろう。

(4) c. については、図11に示す通り、1名が「多すぎる」と感じていたものの、他の8割を超える割合で「ちょうど良い」との回答が得られた。プログラムの内容改善は引き続き図っていくものの、本結果より当面は内容については据え置く形で良いと考える。

(4) d. については、図12に示すとおりである。ちょうど良いと答える者が半数である反面、それと両極に多いと感じる者と少ないと感じる者が半数を占める結果となった。学生の英語学習に対するニーズの違いがある中、1つの研修プログラムで実施しており、今後も期間設定においては検討が必要であろう。一方、本学では本プログラムの他、複数の語学プログラムも用意されているが、それらとの差別化・充実化を図っていく必要がある。

(4) e. は英語授業の期間設定に対する問いであるが、図13の結果から、2週に分散することは誰も望んでおらず、8割の学生が今回の1週目の集中型を望んでいることがわかった。習得した英語知識・技能を翌週で実践するという教員側が意図したスタイルが認知されていると考えられる。

(4) f. の英語授業の難易度であるが、図14より

(4) d. と同様に割れる結果となった。渡航前に個人で有する語学力が左右しているものと考えられる。

(4) g. の結果は図15で示されているが、(4) e. と同様のグラフとして見て取れる。海外に来てまで本学学生の日本人同士の授業は望まず、それぞれ個別のレベルに合った授業を望んでいることがわかる。

(4) h. は図16により英語授業の満足度を示すが、4分の3が満足と示す一方、不満を示す者も4分の1いることがわかった。不満の内容についての記述項目を見ると、「やっていることは中学の文法（時制）」との指摘であった。恐らくは学生自身が有する理解レベルと運用レベルの乖離で英語に葛藤のある学生と推察するが、試験等における英語力は有しつつ、Listening 及び Speaking といった音声面の言語運用力について不足している事情があり、時制に関する知識面の理解をもって内容が容易であるとの不満につながっているものと考えられる。時制、特に完了相・進行相は奥が深い単元でもあり、「知っている」で留まるのではなく「適切に使い分けて運用できる」といった視点が当該学生にあったかどうか、この点が疑問として残る回答であった。

(4) i. 及び j. は RMIT における講義や学生交流に関する満足度であるが、一部無回答があるものの、不満の回答はなく、一様に満足していることが伺える。

(4) k. 及び l. は TA 業務に関する質問項目である。図19では TA としての業務回数を含めた時間の長さについての満足度を示している。半数がちょうど良いと回答する反面、3分の1が長いと感じる者もいた。クラスの特徴が反映された結果として見て取れ、不満には夜遅くの時間帯の担当について敬遠する回答があった。実際、17:30～20:30の授業が2回設定されており、本学でいう夜間主コースの1～4限にあたることから、1日あたりの拘束時間として「長い」と感じたことと解釈できる。また、事前指導の段階で夜間の治安に関する注意点についても指導しており、その心配もあったものと考えられ、今後は時間設定について改善を要する点として受け止めている。

(4) m. はホームステイについての満足度であり、図21がその結果を示している。8割強が満足している反面、ホームステイ先によっては5分というシャワー時間の制約があった所や、食事の点が不満につながったようである。

最後となる (4) n. 及び o. は研修効果について尋ねた項目であるが、全員が英語力向上及び英語学習動機の向上について肯定的な回答をしており、一応の成果はあったと見なしている。

全体としてまとめると、研修プログラムに対する学生からの評価として肯定的な回答で占められたと解釈できる。一方、不満として挙げられた項目はいずれも異文化ギャップに起因するものであり、シャワー利用時間の短さ、1単位時間における授業時間の長さ、夜にまで及ぶ授業時間枠の長さ、知識ではなく運用力を重視したクラス分けによる授業項目内容への不満等の否定的意見は、いずれも日本では経験しないことであり、ある意味でのカルチャーショックであったのだろうと考えられる。

また、(2) に示した達成目標と照らし合わせた場合、次の (5) a.～d. に挙げた点により、一連の経験や活動は達成目標のいずれの項目も概ね満たしていると解釈でき、目標を達成することができたと考えている。今後は習得度の程度について、さらなる詳細な追跡調査が求められることになろう。

(5) a. 英語授業の履修を通して日本語TA実務

を遂行できるだけの必要な外国語コミュニケーション力を習得した

- b. RMIT 学生との交流行事や日本語授業 TA 業務を通して文化の多様性を理解した
- c. シャワー利用に代表される異文化環境において困難な状況に遭遇した場合の自己解決能力を習得した
- d. 研修で学修した内容を踏まえつつ、現地調査活動に関する英語による研修報告を行った

5.2 研修報告書

研修報告書は、事後アンケートには表れてこない内容を含み、参加学生各々が自身の言葉で素直に体験を表現したものであり、取組の反省や改善に対して、非常に価値の高いものとなる。一方で、それは綿密かつ質的な分析を要求することもあり、コーパス研究の道を歩んできた著者にとっては、その文書は今後の方向性を見極める貴重なデータ・言語資料となる。その詳細な分析は次稿以降で扱うこととし、実践報告としての本稿では、著者が注目したいいくつかのキーフレーズを掲載するとともに、内容を解釈していくこととした。 (6) にそのキーフレーズを記す。

- (6) a. 毎日の昼ご飯の時間ですらも英語の勉強
- b. 試練の連続
- c. 語学を始めて半年で弁論大会出場には驚き
- d. 幸せがまず大事だと考える
- e. 水に対する認識が違う
- f. 間違いなく人生のターニングポイント
- g. 下手な英語でも喋る勇気がついた
- h. 日本人も変化に寛容であるべき

(6) a.~c. については、異文化接触における気づきに起因するものである。いわゆるカルチャーショックを引き起こす要因となる。これらを見ると、語学に対する難しさの認識や、それに加えて一部喜びとも受け取れる印象を抱いていたと考えてよいだろう。特に (6) c. は現地学生の語学に対する直向さとその結果を直視できた結果生まれた印象であり、それが (4) o. の肯定的な回答につながったと考えることができる。(6) d.~e. は他文化理解と自文化認識につながるフレーズである。

こういった経験の繰り返しにより、ゆくゆくは多文化共生の価値観につながるものと考えられ、その第一歩を踏み出した貴重な異文化接触であったのだろうと考える。(6) g.~h. は上述した (6) a.~f. までの気づきから導き出した、異文化に接した日本人としての視点による、日本国外から見た日本人像に対するグローバルな価値観による意見と言ってよいだろう。日本人英語としてのアイデンティティの確立、前例主義と言われる国民性に対する彼らなりの発見であったのではないかと考え、これが今後の新規性を生む原動力に結びつくのではないかと感じられるフレーズである。

著者自身、学生引率者として同行したのであるが、参加学生の成長について肌で感じることはできても、それを表現する素材が乏しいことは毎回引率毎に感じている。研修報告書に見る彼ら独特の言い回しは、彼らの成長を示す一端であると認識しており、研修報告書を今後も蓄積し詳細分析のための貴重な言語データとして活用したいと考えている。

6. おわりに

本稿では、これまで本学で受動的な英語授業参加による海外研修プログラムから、日本からの TA 派遣とした実務を担った海外研修プログラムへ再構築の過程について、主に平成28年度の事例を対象に事後アンケート及び研修報告書の結果に基づいて論じた。英語を苦手とする理系学生においても、学生自身が有する母語の能力を用いて、その日本語初級学習者に対し、自身の語学力の限界は有しつつも外国語（英語）を用いた活動を行うことは、海外で一定の実務をこなしたという満足度につながった。英語学習途中にある発展途上の者にも海外で活動の場を提供できる仕組み作りは容易ではないものの、本実践が一つの参考事例になれば幸いである。

本稿冒頭にも述べたが、地方大学は大都市における大規模展開する諸大学と異なり、外国人との生の異文化交流の機会は非常にまれであり、その種の経験は海外研修への依存することになりがちである。普段からの慣れが無い分、異文化交流へのハードルも若干高めになるのかもしれない。今後も、学生へ勇気を持たせ、積極的にグローバルな世界へ進み貢献できる人材育成に努め、一人でも多くの若者にグローバル人材の魅力を感じてもらいたいと本稿執筆で改めて感じたところである。

謝辞

本プログラムを実施するにあたり、RMIT の School of Global Urban and Social Studies に所属し現地コーディネータとなって頂いた Ohashi Hiroko 先生をはじめ、本学学生を日本語授業に快く迎え入れて下さった非常勤講師の Hama Chie 先生、Aiko Mizue 先生、Fujioka Maya 先生、ならびに期間中の交流行事の企画運営をして頂いた Student Committee Member 各位に対し、心より感謝の意を表します。ご協力下さり、誠に有難うございました。また、本稿執筆にあたり、初年度より交流活動の礎を築いてこられた本学国際交流センター門澤健也先生、継続的な交流プログラム運営にご尽力頂いている山路奈保子先生をはじめ、関係教職員の皆様に謝意を記し、心より御礼申し上げます。

注

- [1] 本稿で述べる TA は、RMIT において給与が支給されるような契約関係にある形態ではなく、研修中のボランティアとしての活動を指す。活動としては既に教室ごとに配置されている RMIT の TA と同様に従事するため、本稿では統一して TA と表記することとする。
- [2] 顕著な例としては、著者の前任校でもある工業高等専門学校（高専）に在籍する学生も理工系学生に分類されるが、教員の真摯な活動により改善は図られつつも、未だ英語が弱いと認識されている。
- [3] 本学では本プログラムの他、アメリカ・ウェスタンワシントン大学（WWU）における3週間の英語研修及びボーイング社の工場見学プログラム、ドイツ・ツヴィッカウ応用科学大学への英語研修及び異文化体験プログラムを提供している。位置付けとしては、RMIT 研修が学生交流を主体とした語学・異文化研修事業、WWU 研修が語学集中講座を主体とした事業、ヨーロッパ研修が非英語圏学生との英語コミュニケーション体験事業という三分類としている。

引用・参考文献

- 1) 小野真嗣. (2013). 「国際遠隔授業の実践による成果と課題—6年間の取組から見てきたこと—」『全国英語教育学会第39回北海道研究大会発表予稿集』, pp.150-151. 全国英語教育学会.

会.

- 2) 小野真嗣. (2016). 「高専における国際技術者教育の実践—グローバル人材育成と工学教育—」『グローバル人材育成教育学会第3回北海道支部研究大会予稿集』, pp.22-23. グローバル人材育成教育学会北海道支部.
- 3) 金子義隆. (2016). 「海外留学・研修が英語学習動機に与える効果の検証」『全国英語教育学会第42回埼玉研究大会発表予稿集』, pp.358-359. 全国英語教育学会.
- 4) 吉田三郎, 小寺光雄. (2012). 「海外短期語学研修の効果を高める方策について」『研究論集』第31号, pp.11-20. 全国高等専門学校英語教育学会.

受付日2017年2月10日、受理日2017年3月24日